

Title	陝北・山東画像石の類似点をめぐる覚え書き：冥界への到達手段を中心に
Sub Title	The similarity of stone engravings between Shanxi (陝西) district and Shand-ong (山東) district
Author	桐本, 東太(Kirimoto, Tota)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.97(97)- 118(118)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 東洋史 挿図
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0097

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

陝北・山東画像石の類似点をめぐる覚え書き

——冥界への到達手段を中心に——

桐 本 東 太

まずは図1・2をご覧いただきたい。図1のほうは陝北、図2のほうは山東画像石から選択した絵柄である。

この二種類の、表面的には全く異なる外形を呈する画像が、実は同一の民俗的思考を背景にして作成されたものである、と最初に断言してしまった場合、読者諸兄の困惑はまぬかれまい。しかし私は存外にまじめ、かつ真剣である。というよりも次のように換言したほうが手っ取り早い。本論考の目的は、この二つの画像石の民俗学的な分析によって、陝北・山東の両画像石が持っている、精神的な深部における通底点を摘出することにある、と。冒頭に紹介したいのは、画像石研究の、中国における最高権威者である信立祥氏による文言である。

「画像石の示す内容、および画像石の配置上の特徴から、各地区に分布する画像石の交流と影響を考えること

は、かなりの困難をとまなう、いや、さらに言えば不可能である^①」。

果たしてそうであろうか。菅野恵美氏が指摘しているように、陝北・山東画像石の間には、風神の存在、拝礼図の類似、といった共通項が摘出できる。^②さらに菅野氏が指摘していないところを眺め渡すと、樓閣の屋根に取り付いているテナガザルなどを追加することも可能である。しかし似たり寄つたりの画像をただ並列的に並べるだけでは、画像石の研究に対して寄与するところは少ない。問題は、そうした画像を中国古代の人々をして彫琢せしめた、民俗的動機の解明にある。

そこで本稿では、まず陝北画像石に類出する、牛頭鶏頭神人像の考察から着手することにする。なお図版3・4に見られるように、牛頭鶏頭の神人像は、図1の他に



図1 『中国画像石全集』5 (山東美術出版社、2000年) (以下『全集』と表記する)
162～63頁、神木大保當出土



図2 『全集』2、35頁、微山県兩城镇出土

二種類のバリエーションがある。中国古代の画像石集をいく冊かめくったことがある人物であるなら、牛と鶏の頭を持つ人物は、かなり奇態なものとして、その脳裏に深い印象をとどめているはずである。中国人の研究者もその例にもれない。このモチーフに関しては、すでにいくつかの専論が発表されている。

その中から、まず葉舒憲氏による研究を検討してみよう。^③ちなみに葉氏が研究の対象としたのは図1の画像石である。葉氏は牛頭の神人のほうを西王母に同定する。そしてなぜ「牛の頭」なのか、という疑問については以下のような答えを用意している。

「比較神話学的観点からみると、牛の角、あるいは牛の頭のシンボルは、世界中の神話や芸術の中にあって、かなり普遍的に見られるものであり、通常は女神や母神がその正体である」。

そしてフランスは旧石器時代の、牛の角をささげ持った裸体の女性像をかかげながら、月と女性は、その周期的な満ち欠けと月経から、そして月と牛の角はその形の類似性によって、「三位一体神話関係」を構成していると説き、その本質は再生と豊穡の女神にあるとする。これを陝北画像石に帰納すれば牛頭西王母になる。対して

東王公は、『神異経』に「人形鳥面而虎尾」、つまり頭が鳥の形をしている、とあることから、その同定には問題がない。

大づかみにまとめるとざっと以上のような議論になる。しかし論文とは恐ろしいもので、この文章だけを眺めていると、何となくそのような気がしてくる。しかし葉氏は図3に示されているように、どう考えても守衛としか見えない牛首・鶏首の人物画像石の存在を無視している。さらに葉氏の主張に対して、致命的なダメージを与えるのが、図5である。右側の仙樹の上に鎮座しているのは、右側に羽人がひかえ、かんざしを着用しているところから、明らかに西王母である。ところがその左下には牛頭の神人が、しかと刻まれている。葉氏の学説に飽くまで固執するならば、この図面の中には、二人の西王母がいることになってしまう。これは大いなる矛盾である。したがって葉説は成り立たないとするのが妥当な落としどころであろう。

次に牛天偉・金愛秀『漢画神靈図像考述』の記載を一瞥しておこう。^④この著書は、最初のほうで「牛トートム」などを持ち出してきたりして、「本当にこの本大丈夫かな」という疑義がわいてくる。しかし全体を見渡す



離石馬茂莊出土

陕北・山東画像石の類似点をめぐる覚え書き

一〇一 (一〇一)



図3 『全集』5、184～85頁、



図4 『全集』5、3頁、輸林古城灘墓門画像石

とその記述はしっかりしており、牛頭神人像は天と地の間をつなぐシャーマンである、との断案をくだす。そして鶏頭神人のほうは、「陽」の動物である牛に対して、「陰」を象徴する鶏が選ばれたものと推測している。

『漢画神霊図像考述』に比較的近い見解を提出しているのが小南一郎氏である。小南氏は「牛は犠牲として殺されることによって始めて、その儀礼上での機能を發揮したからだと推定される。(中略)牛を犠牲にする祭祀の、最も本質的な機能は、天と地とを疎通させること⁽⁵⁾にあったのである」とされている。

これのどこが『漢画神霊図像考述』と似ているのか、という人もいるかもしれない。しかしそうした疑念を解消するにあたっては、シャーマンも犠牲獣もこの世と異界をつなぐ媒介者である、という一点で、同様な性格の事象なのだ、と説明すれば事足りるのではあるまいか。

菅野氏が指摘するように、陝北画像石の大部分は、墓室の入口にあたる門のところに配置されており、そこはまさにこの世とあの世との境界である。したがってこの二つの世界を結ぶために牛形の神像が彫刻されたとする考えは、十分に説得的である。

ただ小南氏の失敗は、鶏のほうにあった。小南氏はこ



図5 『漢画総録』2・米脂（広西師範大学出版社、2012年）118～89頁

れを「桃都樹や扶桑樹の頂上にいる天鶏と関係を持つものである」とされたが、これは牛の果たす役割に比較して、相当にアンバランスである。

『周礼』春官・鷄人の条に「鷄人は鷄牲を井（＝供）することを掌る」とあり、中国古代に鷄を神々への犠牲として供える習俗のあったことがうかがわれる。つまり、私見によると、陝北画像石の牛頭・鷄頭の神人は、死者を冥界に送りどけるべく用意された、供物であったということである。

これで陝北画像石のほうは、一応片が付いたと

思われる。次に問題にすべきは山東画像石のほうである(なお蛇足との謗りをまぬかれないうかもしれないが、山東・陝北画像石の相互照射を目的とする筆者の眼中には図6の山東の画像が目には焼きついて離れない。ここには東王公と並んで、左側には馬頭、右側には鶏頭と狗頭の神人が並立されており、三人はむしろ、拙論のコンテクストからすると、墓主人のあの世への無事な到着を東王公に懇願に来た使者のごとくである。ただここでは若干の説明を要する。鶏はいいが、他の動物は何なのだ、という疑問である。ただ、この不信を解消するには、さほど労力を要しない。馬は、車馬坑に代表されるように、

古代中国では、最高にして最高値の犠牲であった。また犬は、すでに鈴木健之氏が指摘しているように、この世とあの世とを結ぶ力をもった、霊獣である。このことについて有名な単語を取り上げるなら、たとえば『史記』

孔子世家に「喪家狗」という表現があることは誰もがご存知のことであろう。これは城壁を前にして、しょんぼりと佇んでいる孔子その人を比喻したものであり、たとえば李零氏などは「家(飼い主)を喪(うしな)った狗」との解釈を提示しているが、うろんである。「喪」式(葬式)を出した家では、死者のお供として「狗」も殺されるの

で、狗自身がしょんぼりしているのは何の不思議もない)。

さて、私の注目するのは図2の画像である。図像の中心は巨大な臺榭建築であり、これが画面の中央部まで張り出している。そしてその中には男女二人の人物が鎮座している。彼らが夫婦であることは、漢代の夫婦合葬の流行を考えれば、的を外れた解釈とは言えない。そして彼らの下には水面が広がり、そこで漁師たちが漁撈活動に従事している。

まずこのモチーフについて菅野氏が名づけた「鯢魚臺」という名称をとりあえず借用しておく。⁹この図柄について中国の学界では、「秦漢時代には園林を造作することが流行した」との前提のもと、その「園林」の一部を構成する「水榭」を描いたものであるとする解釈が一般的であり、それ以上に突っ込んだ考察はなされていない。¹⁰

これに対してわが国では、土居淑子氏が早くからこの画題に注目されていた。土居氏の見解はこうである。

「春水面に現われた魚の姿によって時の移り変りを知ることの意味となる」。¹¹

漢代画像石の図像解釈はまことにもって困難をきわめ

るが、そこに一定の方法論が確立されていることは、研究を進めるにあたっての必要最低条件であろう。そうした意味でいえば、「時の移り変りを知る」というのは、確固とした立脚点を持たない砂上の楼閣となる。しかし中国の研究者たちが、さほど気にとめなかった漁撈活動に着目している点、それから季節を「春」ととらえている点は、慧眼というより他はない。

さらに土居氏はこうした解釈を提示するにあたって、『左伝』の隠公元年にまで時代をさかのぼっている。私も土居氏の作業過程にならって『左伝』の記事から考察をはじめてみたい。それは次のような記述である。「五年、春、公は將に棠に如き、魚者を觀かん」とす。遂に往き、魚を陳ねて之を觀く。つまり春秋時代の魯の国には、春に君主が自ら出向し、魚を射止める儀礼が存在していたのである。

ここに「春」とあるのは重要である。それは以下の史料が証明する。

○古は大寒降り、土蟄発けば、水虞は是に於いて罟罾を講え、名魚を取り、川禽を登め、之を寢廟に嘗む。

（『国語』魯語・上）

○春は王鮪を献ず。

（『周礼』天官、鮪人）

「献」とは廟の寢に献じるなり。

（『同』疏）

○春祭を挙げ、久禱を塞（＝賽）し、魚を以て牲と為す。

（『管子』禁蔵篇）

つまり、春に魚を取り、これを今は亡き父母の廟に献じることとは、当時としては自然な慣習だったのである。さらに『管子』では、そこで献じられた魚が不老長寿の妙薬となるという觀念が明記されている。

そうした觀念の前提には、

○春三月に当たり、室に菽き、造を壇かし、燧を鑽りて火を易え、井を杼みて水を易うるは、以て茲毒を

去る所なり。（『管子』禁蔵篇）

とあるように、春は四季のあいだにあつて、万物を更新する時であつたと考えられていたことを付け加えておいてもよい。

したがって観魚臺画像石の本質には、春季における魚類の捕獲によつて、今は亡き「死者」の、さらなる「生命力の更新」をはかり、そうした行為を通じて少しでも死者の心に喜びを与えよう、という当時の人々の、切なる思いが込められていたのである。この感情の背後にあるのは言うまでもなく、死者に対する極度の恐れであつた。小南一郎氏が指摘されているように、画像石墓が盛



図6 『全集』2・91頁、嘉祥県満硯郷宋山出土



図7 張從軍『黄河下游的漢画像石芸術』（齊魯書社、刊行年ナシ）下、344頁

んに造宮された後漢代にあつて、祖先の靈魂は、適切な祭祀を継続的に続けていかなければ、子孫に大きな災厄をもたらす恐怖の対象だったからである¹²⁾。

しかし「死者を喜ばせるための配慮」、それがすべてではない。右にあげた史料が明示しているように、捕獲している魚はすべて「犠牲」、つまり生者と死者の間を取り持つ媒介物である。この点を忘却すると、片手落ちとの批判はさけられない。ただ、そう考えた場合、観魚臺画像石において、わざわざ墓主人が登場している点が不可解である。これは張從軍氏が復元した、両城祠堂画像（図7）を一瞥しても明らかであろう。右側には、祭祀に供する鳥類を射る人物が描かれている。これに対し、祠堂画像石の左右対称という考え方を徹底すれば、左側には魚を捕

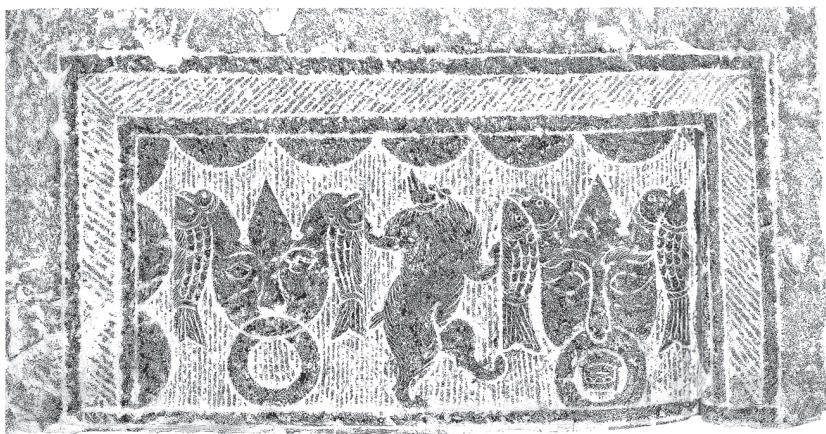


図8 『全集』2、31頁、微山県兩城鎮出土

獲する風景だけを描けばよいにもかかわらず、そこに、今は亡き夫婦が観魚臺に鎮座している姿が描かれている。一枚の画像石に重層的な意味が託されている場合のあることを主張したのもやはり、土居氏であった。¹³ここで土居説を援用することが許されるならば、この画像石には、死者の健康を願うといった思いとともに、「魚」という媒介物の助けをかりて、画面に登場する夫婦がはじめて、あの世に落ち着くことができる、という意味が託されていたのではあるまいか。

山東の画像石において、魚類が現世とあの世をつなぐ媒介物であったことは図8を見ても明らかであろう。この画像を見ると、鋪首に複数の魚が付き上げられている。言うまでもなく鋪首とは日本語でいうところの「カンヌキ」、つまり、この世とあの世をつなぐ、結節点であるから、そこにぶら下げられている魚にも、同様の効能が期待されたであろうことは想像にかたくない（なお本題からは逸脱するが、二つの鋪首の間に位置する動物についても、言及しないわけにはいかないだろう。私の利用した画像石集では、これを「クマ」に見立てている。現時点では、最も妥当な解釈であると思う。それでは何故ここに「クマ」が登場するのであるうか。それは明器、

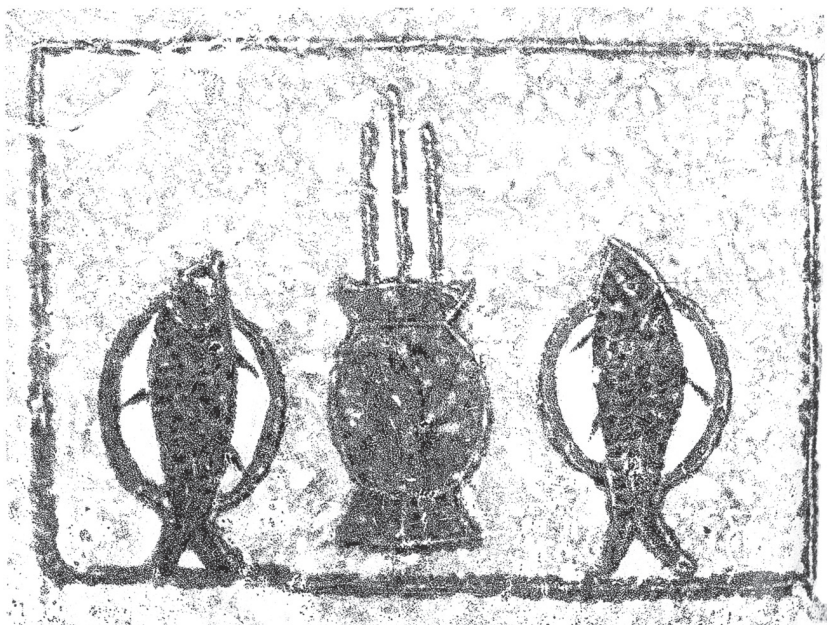


図9 『全集』2、141頁、棗莊市臺兒莊区邳莊郷邳莊村出土

特に穀物蔵の場合に顕著であるが、その建造物を支える支柱が、「熊脚」という、熊の形をあしらったものが一般であることを考慮にいれば、理解に不足はない。「クマ」もやはり、あの世に生息する代表的な動物であつたが故に、この画像石の添景として彫琢されたのであらう。

このように考えてくると、陝北画像石と山東画像石に顕現する民俗的思考の相似点は、もはや明らかであらう。つまり両者ともに、死者があのだ世に旅立つにあたっては、犠牲の助けをかりることが必須の条件であるという觀念が、そこには看取されるのである。こうした考え方をさらに一歩進めれば、この世とあの世はスムーズにはつながっていないが故に媒介物の助けが必要だ、というところまでコマを進めても良いと思う。これを陝北地方と山東地方に共通した、特殊な思考様式として策定することが可能ではないだろうか。今は確証をあげえないが、こうした画像石が生産されていた地域では、実際に牛や鶏、あるいは魚を、葬礼にあたつて供物として提供していた可能性が高いと言わねばなるまい。わずかに一例のみでいささか心もとないが、魚類が死者への

供物とされていたことを表現した画像石が山東には存在する（図9）。これで読者諸兄の納得をいただければ幸甚である。

さて、それでは「媒介物の必要性」という意識はどこからどちらに伝播したのであるうか。残念ながら、私たちはこの点を考えるにあたっての、決定的な決め手に欠いている。しかし陝北・山東画像石の類似点を指摘した蒼野氏は、後者から前者への流れを推測している。畏友蒼野典之氏も、かつて画像石を論じながら話題がこの方面におよんだ時、蒼野氏と同様の見解を示された。私がいぶかって、蒼野氏にその根拠の明示を求めると、回答は次のようなものであった。

「山東画像石には、初発の段階から、完成期にいたるまで、いくつかの段階が認められる。これに対して陝北画像石は、ことの始まりから高度な完成度を示している。いくつかの階段を経てきた山東地域の画像石が、ある段階に陝北画像石に影響をおよぼしたと考えるのが自然だ」。

いずれにせよ、この問題について、現段階で確実な答えを提出することは困難である。今後の課題としておきたい。

しかし陝北・山東画像石の底流に流れる共通点が、「犠牲を中心とした、何らかの媒介物の助けをかりることにより、はじめて死者のすむ楽園への到達が可能になる」という思考様式であると、ひとまず仮定してみるならば、新たな画像解釈が可能になる山東画像石が、いくつか追加される。そのうちの二例を挙げておこう。

たとえば図10の画像石などはいかがであろうか。これは始皇帝が泗水において周の宗教的なシンボルである鼎を引き上げようとし、結局は失敗した故事を骨格としている。普通なら、鑑賞者の視線はそれより先まで到達しないはずである。が、今は違う。橋の下に五匹の魚が描かれているのは、そこが川面であったことを示しているだけではない。その傍証として、画面右上に鳥を射る人物が描かれていることに注目しさえすればよい。これは鼎を引き上げる画像と二重写しの形で、魚と鳥という先祖にささげる供物を捕獲しているところを描いているのである。その何よりの証拠はパズル型に組まれた左上の高層建築である。そこでは被葬者が、子孫の拝礼を受けている。ここは、観魚臺ならぬ観鳥臺とでも称すべき建物であろうが、ここにきてまで子孫は亡父に頭をさげなければならぬのか、と思うと、残された子供たちの悲

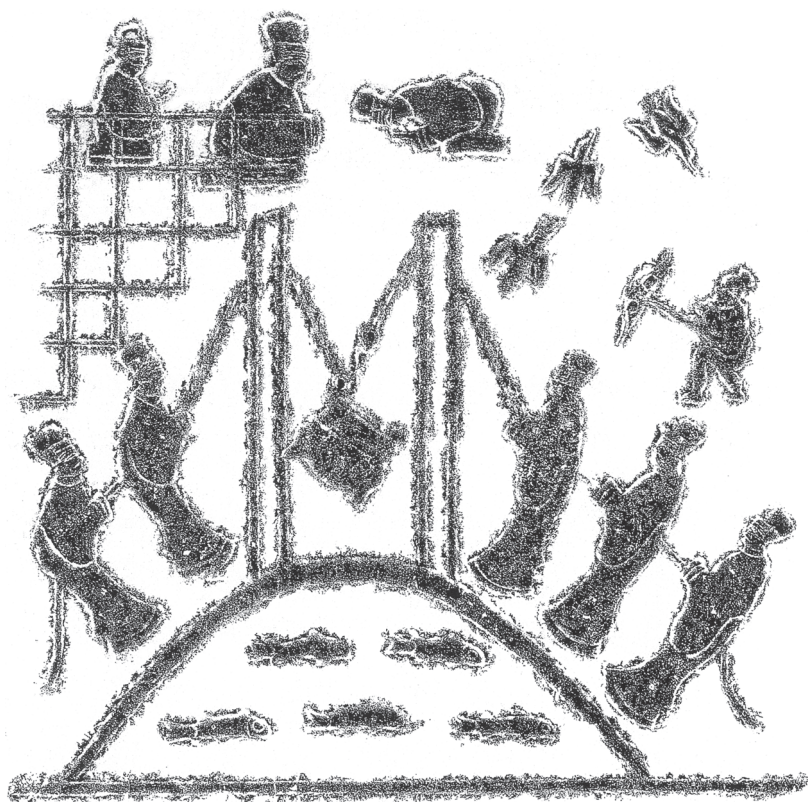


図10 『全集』2、130頁、嘉祥県城東北五老窪出土

壮な思いが、かえって何か滑稽な戯画にすら感じられてくる。

さて、これは本稿の主題ではないので、今回は簡略な言及のみにとどめておくが、図10には画像石作画術の秘密が隠されている。では、それは一体何か？ 本図の核心は魚である。そこから「魚——川」という連想が喚起され、泗水昇鼎伝説が描かれる。また魚は同時に「魚——供物」という観念をも含有するため、始皇帝の伝説故事と同一画面に「観魚臺」「観鳥臺」でも可）が刻まれる。一枚の画像石に複数のモチーフが登場するのは、このような一種「観念複合」とでも称すべき存在がその根底にあり、私達の画像解釈を、より正確なレベルにまで引きあげてゆくには、以上のような中国古代人の脳内回路を的確に把握する努

力が必要とされるのである。

さて、次に挙げたいのが、張從軍氏が祠堂画像石と推測した画像（図7）のうち、右側のものである。樹木がこの世とあの世の境界であることは、佐原康夫氏によっ

てつとに指摘されてきた。⁽¹⁶⁾氏がいうように、境界であるがゆえに、墓所にむかう車馬行列に使用された馬は樹木の右側に、しかと繋ぎ止められている。馬の所在は現世、それに対して樹木の左側は来世。その何よりの証拠が馬と対照して描かれた

羊である。羊は言うまでもなく三年の一

つである。つまり羊は犠牲であり、これまで見てきたように、あの世の側に配置され、死者のつつがな

い到着のお手伝いをするのである。

そこで注目されるのが、樹木の根もとが二股になっている、その真ん中の空間に鎮座している人物である。この人物は現世と来世の中間に位



図11 『全集』1、134頁、沂南県北寨村出土

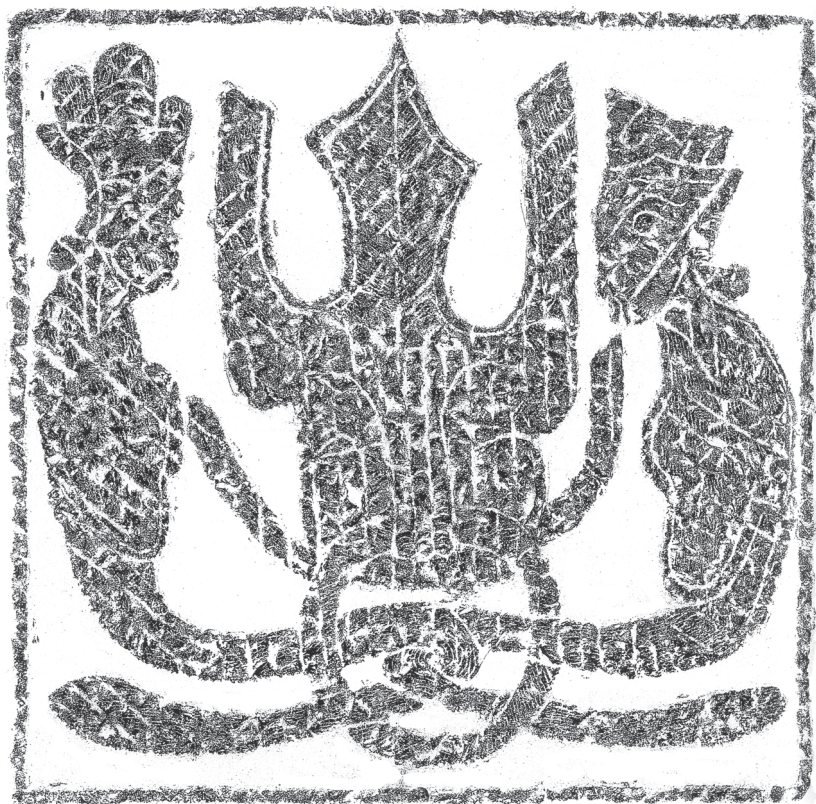


図12 『全集』2、173頁、滕州市官橋鎮後掌大出土

一一二 (一一二)

置しており、境界を守護する神、さしずめ日本でいえばサエノカミの様なものであったのではあるまいか？ 逆に言えば、この神様の鎮座する地点を通過してはじめて、死者はあの世での安息を得る、と考える地域が山東にはあったと推測しても、あなたがち牽強附会な解釈とは言えまい。

さて、ここで一つ、やや大胆な仮説を提示してみたい。山東画像石には、伏羲・女媧の画像が頻出するが、その二人を両手で抱きかかえている人物が描かれている場合が数例ある(図11)。この人物については、従来の研究史上、「第三者」「媒人」などと書き散らされるだけで、要はその正体はわかっていない。なぜなら「第三者」はその言葉どおり、具体的に何かを表現するものではないし、

さらに「媒人」は、伏羲・女媧の婚姻を前提としているが、両者の結婚を説く史料は唐代までくだらなければ、登場しないからである。¹⁷⁾

これに対して、もし小南氏が説くように伏羲・女媧が、死者を現世から来世へと運搬する職能を有していたとすれば、二人を抱きかかえている人物は、サエノカミではなかったか？

いささか大胆な仮説であるが、私が研究者のハシクレである以上、これを傍証する証拠が皆無である、というわけでは無論ない。たとえば図12の山東画像石をご覧い

ただきたい。ここでも伏羲・女媧はその尾っぽを絡みつかせているが、その中心に存在するのは、巨大な鋪首である。鋪首が媒介項であることは、先に見たとおりである。つまり鋪首を擬人化させてしまえば、今まで「第三者」などと呼ばれてきた人物になるのである。さらにもう一例、これも山東画像石から興味深い画像を挙げておこう(図13)。ここでは伏羲・女媧のもつれた尾っぽの真ん中に位置しているのは、二匹の魚である。つまり先程の画像で、鋪首のあった場所が魚類によって置換されているのである。これは、はからずも、「鋪首＝魚＝媒



図13 『全集』3、202頁、新秦市西柳村出土



図14 『全集』2、69頁、鄒城市北宿鎮南落陵村出土。なお「魚車」の例は、南陽画像石にも見える。たとえば『南洋漢代画像石』（南陽漢代画像石編輯委員會編、文物出版社、1985年の図34）を参照されたい。私は南陽画像石を精査したわけではないが、南陽画像石において魚の占める地位は、山東のそれと比較してみると、いちじるしく低い。

「介物」であることを明示するものに他ならないのではあるまいか。

そしてたしかに魚は死者をあの世へと運んでゆく動物であった。図版が不鮮明なのが若干気になるが、図14をみると、二人の人物が、馬車ならぬ「魚車」によって来世へと運ばれてゆく様子がうかがわれることは決定的である。

つまり陝西・山東における共通の死霊観念というのは、牛・鶏・魚といった犠牲獣が、死者の旅路の大いなる助力者であった、というこの一点につきるのである。

こうした事象を、より大きな視野の中でまとめてみると、次のようになる。中国古代に生きた人々は、「境界」の概念に極



図15 『全集』7、76～77頁、簡陽董家埂郷深洞村鬼頭崖墓出土



図16 『全集』7、106～107頁、南溪城郊長順坡出土

めて敏感であつた^{①9}。それは五服の制などを一瞥すれば、一目瞭然であるう。

そして幸か不幸か、当時の人々は、この世とあの世の境にも、境界線を引いてしまった。否、先述した死者への恐怖感を想起すれば、一線を引かざるを得なかったのである。それは佐竹靖彦氏が鎮墓文を分析の対象としながら、「墓主が負つた死の罪科が家族に影響することを防ぐことこそが、鎮墓文の重要な目的であることを思わせる。(中略) 死生處を異にする存在はお互いに妨げてはいけないと言うのが、実は鎮墓文の今一つの基本的な立場である」(傍点桐本)との主張を展開されていることに相通じる。^{②0} 両親が死去した直後、あるいは毎年行われる先祖への祭りのたびに、死者がいかんにして生者の世界と死者の世界の間に横たわる境

界を通過するかが、残された人々にとつて至急の用件になるのは、一種の必然であった。

この点について、これまで陝北・山東画像石を対象にして考察してきた。それでは他の画像石分布地域では、この問題はいかに観念されていたのであろうか。次に四川省を例にとり、ごくごく初步的な吟味をしてみよう。四川省の事例は陝北・山東ときわだつて異なる様相を呈しており、要するに「天門」を通過しさえすれば、死者は冥界に到達できた(図15)。天門が天と地とをつなぐ通路の役割を果たしていたことは、つとに土居氏によって指摘されている。図15のなかで注目すべきは、この天門に、ちょうど身体を門の右側半分によりかからせるような姿態で、一人の女性がたたずんでいることである。この画像の持つ意味を、一層明瞭な形で表現したものが図16である。左側半分は、おなじみの龍虎座に鎮座する西王母の世界、すなわち死者が登仙するあの世を表現している。そこで右半分の情景に目をこらしてみよう。そこには五人の人物とシカ、トリがいる。右端の四人は、子供の侍者と二人の男女である。この男女が、冥界にやつて来た死者夫婦であろう。そして、このグループの中では一番左に位置している人物であるが、節を所持し



図17 『全集』7、72頁、蘆山沫東郷石羊村出土

ていることによって、明らかに冥界Ⅱ天界への使者であることが判明する。そして使者のすぐ真左に「天門」があり、そこに女性が起立していることが確認される(図録をコピーした際に彼女の半身が、いかに工夫しても断裁されてしまった。何とぞ御了解いただきたい)。

つまり陝北・山東で犠牲獣が果たしていた「媒介者」の役割を四川では、一人の女性が代わりに務めているのである。四川には、画像石の研究者によって「半開きの扉」と命名された画像石が複数存在する。ここでは一例のみを挙げるにとどめておくが(図17)そこに刻まれた女性こそ、「媒介者」その人なのである(なお画像石研究者なら誰でも周知のごとく、「半開きの扉」を題材にした画像石の分布は、四川が稠密とはいえ、四川のみにとどまるわけではない。というよりも山東の画像石にも「半開きの扉」は登場する。この点が拙稿の弱点でもあることを告白しておく)。

それでは、この女性の性格はどのように規定されれば良いのであろうか。この点を考えるにあたって示唆を与えてくれるのが、森雅子氏の「執り成しの女神Ⅱ天界への道に関する一考察」という論文である。この論文の内容は題名そのままであり、ある人物が地上から天界へと

飛翔するにあたり、それを執り成し(媒介)してくれる女神が、中国古代社会には存在するという仮説を提起したものである。⁽²³⁾今のところ半開きの扉にたたずむ女性は、森論文のコンテキストで理解しておくのが無難であろう。画像石の分布地は広範な地域にわたっている。今回はその中で、限られた地方しか取り上げることができなかったが、それでも地域ごとに、死者の「あの世への行き方」を組上にのぼせるだけで、さまざまなバリエーションのあることが明らかになった。

繰り返しになるが、画像石の屹立する地域と時代はあまりに広く、かつ悠久であり、拙稿のような、ひどく拙劣かつ短い文章で、その深奥にどこまで肉薄できたかは、極めて疑問である。陝北・山東・四川と並んで、画像石最大の産地である南陽をとりこぼしてしまったのも心残りとしか表現の仕様がでない。また後半部分の尻すぼみぶりには、執筆して思わず赤面するほどであった。これはひとえに私の勉強が足りないせいである。次稿に期したい。

註

(1) 『漢代画像石総合研究』(文物出版社、二〇〇〇年) 三

五三頁

- (2) 『中国漢代墓葬裝飾の地域的研究』(勉誠出版、二〇一二年) 六九頁
- (3) 「牛頭西王母形象解説」(『民族芸術』二〇〇八年、第三期)
- (4) 河南大学出版社、二〇〇九年、一三四～三八頁
- (5) 『西王母と七夕伝承』(平凡社、一九九一年) 二七〇頁
- (6) 『前掲書』前篇・第二章
- (7) 『前掲書』二七〇頁
- (8) 「古代における導犬の觀念について」(『東京学芸大学紀要』第二部門・人文科学、第三〇集、一九七九年)
- (9) 『前掲書』一〇一頁。なお「觀魚臺」画像石については、楊絮飛『中国漢画圖像經典賞析』(河南大学出版社、二〇一三年) 二六一～六二頁に、一通りの集成がなされている。
- (10) 李錦山『魯南漢画像石研究』(知識産権出版社、二〇〇八年) 一〇三～〇七頁
- (11) 『古代中国の画像石』(同朋舎、一九八六年) 一八〇頁
- (12) 「漢代の祖靈觀念」(『東方学報』六六冊、一九九四年)
- (13) 『前掲書』の全体における土居氏の執筆のスタンス
- (14) 『前掲書』七六頁
- (15) 『黄河下游的漢画像石芸術』(齊魯書社、刊行年の記載なし) 三四四頁
- (16) 「漢代祠堂画像考」(『東方学報』六三冊、一九九一年) 二五頁
- (17) 谷野典之「女媧・伏羲神話系統考」(『東方学』第五九輯、一九八〇年)
- (18) 「中国西部地域における伏羲・女媧圖像」(上)(『龍谷大学論集』第四七三号、二〇〇九年) 三二頁
- (19) 古代中国人の「境界」に対する敏感な反応については、書物として相田洋『異人と市——境界の中国古代史』(研文出版、一九九七年)、論文レベルでは斎藤道子「春秋時代の「国」——「国」空間の性質とその範囲」(『東海大学紀要・文学部』第七一輯、一九九九年) などがこれに言及している。
- (20) 「漢代の墳墓祭祀画像における亭門、亭闕と車馬行列」(『人文学報』第三三五号、二〇〇二年) 九四頁
- (21) 『前掲書』四五頁
- (22) 例えば土居淑子「古代中国の半開の扉」(『古代中国考古・文化論叢』言叢社、一九九五年)、小南一郎「半開きの扉の彼方に——靈魂のゆくえ」(『国学院中国学会報』第五十五輯、二〇〇九年) など。
- (23) 「神女列伝 比較神話学試論2」(慶應義塾大学出版会、二〇一三年) 所収